

《2011年1月例会報告》

【日 時】2011年1月27日（木）19:00～21:10（その後「ルン」～2:00過ぎ。タクシー）

【会 場】筑波大学附属高校 3F 会議室（東京都文京区大塚 1-9-1）

【演 者】賀川 浩（スポーツジャーナリスト）

【テーマ】戦前のサッカー育成 —神戸一中を中心に

【参加者（会員）15名】秋元大輔（サッカーライター） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） 賀川浩（スポーツジャーナリスト） ※菊地悟（(株)角川書店） 北原由（武蔵野北高校／青梅 FC） 国島栄市（ビバ！サッカー研究会） 嶋崎雅規（帝京高校） 関谷綾子（静岡の弁護士） 名方幸彦（文京教育トラスト） 中塚義実（筑波大学附属高校） 中西正紀（RSSSF） 根本いづみ（フリーライター） 藤田直樹（ビバ！サッカー研究会） 本郷由希（草サッカー／ヴィッセル神戸サポーター） 本多克己（(株)シックス）

【参加者（未会員）9名】猪狩翔（アスレティックトレーナー） ★押尾愛子（(財)ユーハイム体育・スポーツ振興会） ★川本真聖（NTT データ・セキュリティ(株)） 佐藤真成（サッカー史／「蹴球亭」） ★真田久（筑波大学） 白髭隆幸（スポーツ三昧） ★原田堯（日本鍼灸理療専門学校） 福島寿男（サッカー史研究会） ★藤田芳正（帝京高校）

【報告書作成者】根本いづみ

注1) ★は初参加のため参加費無料 ※は新入会

注2) 参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

戦前のサッカー育成—神戸一中を中心に—

賀川 浩（スポーツジャーナリスト）

<目 次>

1. はじめに
2. 日本のサッカーは高等師範の卒業生と外国人教諭から中学校に広まった
3. 御影師範の強さの裏に、旧制中学と師範学校の年齢差
4. 神戸一中を半日の指導で変身させたチョウ・ディン
5. 神戸一中蹴球部キャプテンだった白洲次郎
6. 第9回極東大会、東大中心の代表チームで初のアジア1位に
7. 小学校からボールを蹴る世代の登場、そして予科を持つ大学の台頭
8. サッカーの盛んな神戸。神戸一中では弁当を食べながらボールを蹴っていた
9. 部史をまとめ、神中クラブを組織化。現役とOBをつないだ河本春男先生
10. 中学生に最新の3FB制を導入
11. 難敵・朝鮮代表のチームに対抗
12. 河本先生の影響は転任後にも及び、4年間で全国優勝4度
13. 敗因を半世紀考え続けた青山師範の太田哲男さん
14. 神戸一中のタイトル獲得数

1. はじめに

資料というほどのものでもないのですが、お配りしたのは、いまの「全国高校選手権」の前身、大正7年（1918年）から始まった「日本フットボール大会」の表です。普成中学が優勝している昭和15年、そこまでが戦前の「日本フットボール大会」の流れをくむ全国大会でございます。

いま、高校の90周年史をまとめていると思うのですが、高校の90年と申しまして、この「日本フットボール大会」が全国の大会に名実ともになったのは大正15年（1926年）から。はじめの8回ほどは近畿地方の大会ということになります。こうした大会は東京、名古屋とあちこちにあったわけですが、「日本フットボール大会」という名前でスタートした行きがかり上、これが「全国高校選手権」の前身となり、第1回から勘定しています。

のちに関東協会や東京の関係者たちから、大会を東京に持ってきたいという話があり、いま現在は東京に移って盛大にやっています。そのいきさつについてはまた、90年史の中で色々面白い話が明らかになると思います。今日はそうした全体の話ではなくて、その中で選手たちがどのようにして育ってきたかをお話します。

はじめにお断りしておきますが、私が神戸一中にいたのは1937年（昭和12年）からの5年間、1942年（昭和17年）に卒業しています。その5年間は日本の戦前の最盛期、幻の東京オリンピックに向かって日本のスポーツが動き始め、サッカーも非常に、1936年（昭和11年）のベルリン・オリンピックで氣勢が上がって上昇気運にあった時代です。しかしながら、スポーツ全体のスケールも、サッカーそのものも、いまに比べればもっと小さいものでした。

全国大会の出場数が16チームの当時でも、兵庫県は1県で1代表枠を持っていました。ですから、全国大会で優勝するためには、まず兵庫県で4試合のノックアウト・システムの予選を勝って、さらに全国大会で4試合。合計8試合勝てば全国優勝です。いまは、8試合勝って兵庫県の決勝あたりかな？（笑）というぐらいの規模ですから、「古い人が何を言うたってどうっちゅう事はないじゃないか」という話になっても、当然ではあります。

ですけれども、時代時代にはそれぞれのレベルがありますので、その中で選手がどういう風に育ったかということをお話しようと思います。

でもまあ、どれくらいうまくお話できるかどうか分かりません（笑）。実は昨日の夜中、今日のメモを書こうと1時頃に机の前に座ったのですが、3時頃、机の前で目を覚ましてね。それからまたしばらくうつらうつらとして……。他にも書かなくちゃイカン原稿が1本ありまして、5時にはそれを書きはじめたものですから、折角つくったメモのとおりうまく言えるかどうか…疑問でございます。

2. 日本のサッカーは高等師範の卒業生と外国人教諭から中学校に広まった

まず、戦前の学校の教育のシステムを簡単に説明しますと、小学校があつて、中学校があつて、中学校は明治のときに尋常と高等とできて、それが後に高等学校となりました。高等学校には官立と地方の公立がありましたが、牛木さんのようにボクの年齢に近い方は……牛木さんは新潟高等学校かな？ あなたは旧制やろ？

牛木：いや、ボクは中学は旧制ですが、高校は新制です。

賀川：うわあ、新制か（笑）。ちなみに中条（一雄）さんは、広島高等学校でした。

旧制高等学校というのは、東京帝国大学（東大）、京都帝国大学（京大）といった大学に入るための予科的な色彩のある学校で、一般教養ならびに語学をみっちりやる場所でした。その学校、高校生たちに「東京帝大のサッカーを強くするために、サッカーをやらせよう」ということを考えたのが、東京帝大の野津謙さん。のちの第4代JFA会長です。野津さんは非常に知恵者で、高校の大会、いわゆる旧制のインターハイというのを大正12年（1923年）に始め、それからしばらくはインターハイが盛んになりました。

旧制の中学校に、ここ筑波の前身である東京高等師範（東京高師）という教育系の大学がありました。ですからここは、昔でいえば東京高師附属の中学校、旧制の中学校になります。

東京高師や広島高等師範を出た人たちが中学校の教諭になるわけですから、日本のサッカーはまず、高等師範を出た人から中学校に入っていきます。それから、明治の中頃にはイギリス人の先生を取っていた中学校がたくさんあって、彼らが各地で教えていた。つまり、ルートとしては、高等師範と、外国人の語学の先生が持ち込んで教えたものがあって、サッカーは全国各地で割合に早くから始まるわけです。

そのことが今までなかなか分からなかったのですが、最近の研究でだんだん分かってきましたね。ボクたちが昭和41年（1966年）に神戸一中の部史をつくったときにも古い文献が出てきて、学校ができた明治29年（1896年）にはもう寮ではボールを蹴り始めていたと、そのボールはロンドンから神戸市に贈られた5つのうちの2つだったと書いてあった。明治29年（1896年）というと、先日テレビでやっていた『坂の上の雲』の日清戦争の、次の年です。

そういうふうに、サッカーは中学校には各地から割合早くに入ってきていました。そして歴史でいえば大正6年（1917年）、日本協会ができる（1921年）より前に、日本代表は「第3回極東大会」で初めての国際試合に出ているわけです。

このときは日本サッカーの始祖ともいえる東京高等師範のチームが試合に出て、負けているのですが、日本国内でやったために大変な人気を得ました。そうして次の年の大正7年（1918年）に、東京で「関東蹴球大会」が、大阪（豊中）では「日本フットボール大会」が始まるわけです。名古屋でも東海蹴球大会がありました。

「日本フットボール大会」というのは、大阪では毎日新聞が主催でした。東京では、東京高師とそのOBでつくった蹴球団が主催の形になって一まあ実際は高等師範がほとんどやっていたのでしょうけども、朝日新聞が後援をしました。

ちょっと話が飛びますけれど、朝日新聞が後援してくれたのは、登山で有名な藤木九三さんが当時、事業部におられて、後援に力を尽くしてくれたそうです。まあそれは別としても、そうして関東、関西、東海で大会が始まりました。

「日本フットボール大会」は、毎日新聞は非常に気宇壮大なことを考えて、ラグビーをラ式、サッカーをア式として「フットボール大会」とくくってスタートしました。そもそもなぜフットボールとしたかという、これはサッカーから言い出した話ではなくて、慶応のラグビーOBたちが、関西でもラグビーをやりたいと考えたからのようです。大会名に“日本”とつけたのはおそらく、これはボクの推測ですが、日本のラグビーの先祖である慶應を呼びたかったからでしょう。しかし実際に始めようと思ったら、関西ではラグビーは3校程しかやっていなかった。それではどうしようもないので、サッカーを抱きこもうと——いや、その時分はサッカーとは言いません、フットボールと言っていました。サッカーは当時も7~10幾つかの学校でやっていたから、それを抱き込んでスタートしたわけです。

そうして第1回大会を開催し、慶應はわざわざ西へ下がってきてくれたのですが、大学のチームですからね。「なんでオレたちが中学生とやらなきゃいけないんだ、やれるわけがないだろう」と、神戸外人クラブとだけ試合をして帰っていった。おそらく、そういういきさつで始まったので、ラグビーとサッカーを併用してやっていくことになりました。これが、昭和10年(1935年)の夏に切り替わります。それまでは1月か2月にやっていました。

3. 御影師範の強さの裏に、旧制中学と師範学校の年齢差

小学校の先生を育成する師範学校は、大会では中学校のレベルに加わっていました。まあ、関東ではのちに師範学校と中学校を分けるのですが、「日本フットボール大会」は師範学校もずっと一緒にやっていました。

当時の小学校は、尋常小学校——尋常というのは普通という意味です——と高等小学校と2つありまして、尋常小学校を出てから高等小学校(2年間)へ行き社会に出る人もあったし、あるいは、商業学校に行ってお店で働く人もありました。師範学校の生徒は、高等小学校を出てから来る人が多かったので、師範学校は中学校よりも平均して年齢が2歳上になる。ですから、師範学校も旧制の中学校もみな5年制なのですが、旧制の師範学校の3年生が、中学校の5年生(最上級生)と同じ年齢。ここで年齢の幅があります。

この年齢層でいいますと、中学5年は今の高校2年、師範学校の5年生は今の大学1年生にあたります。そうした年齢差もあって、日本のサッカーの中学レベルでは師範学校が長いあいだ各地で強かったわけです。「日本フットボール大会」は近畿の大会ではありましたが、御影師範学校が第1~7回までずっと勝ち続けていた。その一つには、練習が上手かったせいもありますけれども、年齢が高かったことがある。それから、師範学校はみな全寮制ですから、年がら年中合宿をしているようなものです。同じ顔触れでチームワークも良く、練習も十分にやれたから、旧制中学のチームはなかなか適わなかった。ところが、師範学校には勝てないと思っていたなかで、どういうわけか、神戸一中の私どもの先輩たちは違いました。

4. 神戸一中を半日の指導で変身させたチョウ・ディン

神戸という街の中で、神戸一中と御影師範は割と近くでした。一中は、明治はじめにできた「神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ」(KR&AC)という外国人クラブにも近く、ここから新知識が入ってきました。

御影師範は合宿をしてガンガン練習をしますし、体も大きく立派な選手がたくさんいたから、一中はなかなか勝てずにいた。しかしなんとか勝つてはないかと、2歳年齢の低い子どもたちが一生懸命考える、だが勝てない——ということをしているうちに、神戸一中の先輩たちにとってものすごい画期的な事件が起こります。

それが、日本サッカー史でみなさんご存知の、日本サッカー殿堂にも入ったビルマ(現・ミヤンマー)人留学生チョウ・ディンの半日指導です。チョウ・ディンさんは大正12年ぐらいからここ筑波の旧制附属中学にも教えに来たりしていました。

チョウ・ディンさんの本『How To Play Association Football』を見ると、彼はサッカーを色々知っていたようですが、あるきっかけで早稲田を教えるようになり、早稲田の高等学院が全国高校

インターハイで優勝する。そこでチョウ・ディン流のサッカーが「これはスゴイ」と噂になって、高校の方に流れていった。と同時に、インターハイを通じてチョウ・ディンの名声が高まってきました。

そんなときに、関東大震災（大正 12 年）が起き、地震で留学先の東京高等工業学校（現・東京工業大学）の校舎が潰れて授業がなくなってしまった。それで時間ができたチョウ・ディンさんは、巡回コーチに出かけることになったわけです。

御影師範にも 1 週間ほど教えに来たのですが、チョウ・ディンさんが休日に宝塚歌劇を見に行く機会を狙って、自分たちも教わろうと考えた知恵者がいた。歌劇には行かず早々に切り上げることになったチョウ・ディンさんを、宝塚の川近くにある松林の広場で神戸一中の生徒たちが待ち構えていて、サッカーを教えてくれと頼み込んだ。一中のメンバーはみな着替えて待っているし、チョウ・ディンさんにとっても嫌いなことじゃないですからね、教えてくれたわけです。

一中の生徒たちは、外人クラブ「KR&AC」の試合などを見て、「こんな攻め方があるのだな」というようなことは知っておったようですけども、技術を系統立てて教えてくれる人や先輩はいなかったから、それまで色んな疑問を持っていた。それが、その半日の練習、チョウ・ディンさんの技術指導で疑問がすーっと氷解した。

「チョウ・ディンさんは非常に分かりやすく、体の動きとかそういうものを力学的や、重心だとかそういうことを分かりやすく説明してくれた」と、サッカーの大先輩であり昭和の“サッカーの神様”といわれていた竹腰重丸さんがよく言っていました。

当時の神戸一中の面々は、例えば、文法は分からないけれども練習は一生懸命やっている、単語は知っているけれど、それをどう結び付けていいのかが分からない、という状態にあった。そんなところへ、基礎的な話、文法を教えてくれる人が現れた感じだったのでしょね。それで皆「ああ、そういうことか！」と、あっという間に疑問が氷解したと先輩たちは言っています。

それが大正 12 年（1923 年）のこと。その成果が大正 14 年にあらわれて、近畿の大会ではありましたが、神戸一中は初めて御影師範に勝ったわけです。

御影師範は年齢が上で、学校でも体育の指導者になろうという先生の卵がいるわけですから、みんな体格がいい、体力がある。これに勝つのはどうすればいいか？ このときに一中のメンバーが考え出したことが何かというと――。神戸一中は非力で、ぶつかれば負けるけれども、小さいからだいたいすばしこい。だから、力で押してくるのに対してすばしこさで勝つ、そのためには短いパスをつないで攻め込んでいこうと考えた。

師範学校は体力にモノを言わせて、後ろからボーンと蹴っては何人かの足の速い選手がコーナーヘドリブルして行ってボールを中（中央）へ返してくる。それをヘディングでゴールへ入れる。あるいはドリブルで突っかけてくる名選手がたくさんいた。そういう戦法でやられていたのを、それで例え点を取られても、短くつないで行って相手の裏へ走り込み、スルーパスをシュートする。ゴール前で誰かがノーマークになれば点になる、ということチョウ・ディンさんが教えてくれました。

チョウ・ディンさんは『How To Play Football』の前書きに「フットボールはスコットランドで起こったものである」と書いているぐらいだから、彼はおそらくサッカーをスコットランド人に習ったのでしょね。スコットランド流というのは、つまりイングランドに対抗したショートパスのゲームです。

それまで日本は、中村覚之助さんたち先輩が『アツシエーション・フットボール』という本を出し、普及のために非常に役に立ちましたが、足のどこで蹴るかとか、ボールのどこを蹴るか

というような技術的な話があまりなかった。それをチョウ・ディンがしっかり教えてくれた。短いパスをつなぐにはインサイドキックがいいだろう、もちろんアウトサイドキックも使った方がいい、といった風に。戦術的にも、短いパスをつないで行って（相手に）ボールを取られたら、すっ飛んで行って奪い返す場合もあるけれども、そうではなく皆で追いこんで協同して取る策もある——ということまで教えてくれた。

大正12～14年の神戸一中の先輩たちの書きものには、「BからAにパスを出し、Aが戻してBが来る」（普通のトライアングル）とか、「Bが出してAが取る。そのときに、BでなくてCがここに着いてきて第3の動きをする」というような記載もありました。その程度のことはできるようになるということで、サッカーを考えた。これはチョウ・ディンの成果です。

関西協会の会長で、JFAの副会長も務めた田辺五兵衛さんは、「日本のサッカーはこのときからいよいよ本物になってきた」という言い方をしています。

田辺さんは、私に言わせれば“サッカーの博覧強記”。サッカーのことなら世界中の物を持って、「イングランドのFAを訪れたとき、FAの蔵書のなかで家に無かったのは3冊だけ」と言ったほどでした。まあこれは本当か嘘かは分かりませんが（笑）、とにかく何でも持っている勉強家だった。

そんな人が、古いサッカーの本『全国高校サッカー40年史』（毎日新聞社発行、岩谷俊夫編）の座談会のときに、神田清雄とか第1回、第2回の極東大会、第3回からあとの極東大会に出たもうちょっと上の先輩の前で、「日本のサッカーがまともになったのは、大正14年（1925年）の神戸一中の日本フットボール大会優勝のときからだ」ということを話しています。これは、要するにチョウ・ディンが、サイドキックを使って短いパスをつなぐというサッカーを提唱し、それを一中が一生懸命やった一つの表れ。そうして御影師範に勝てるようになったわけです。

5. 神戸一中蹴球部キャプテンだった白洲次郎

先ほど言いましたように、校内大会は明治29年（1896年）から盛んにやっていて、部史には乱蹴りと称して休み時間にボンボン蹴っていたという話が載っていますが、サッカー部そのもののはじまりは大正2年でした。部というものは、部長なり学校の先生が絡まないと学校の中で認められません。ですから鶴崎久米一という初代校長——クラーク先生の札幌農学校（現・北海道大学）を出た先生——も、「スポーツは奨励するけれども、見る先生がいなければ困る」と言って、大正2年（1913年）にサッカーを知っている先生が学校にやってきて初めてサッカー部、蹴球部というものができました。

もともと素地がある、遊びでやっていたところへ、野球部の付属という形で蹴球部ができた。どこでも初めのうちはそうですが、特に神戸の場合はシーズン制というのか、冬は野球部の練習を止めにして蹴球をしました。ですから、野球とサッカー、両方やった選手もたくさんいるわけです。

余談ですが、いま非常に有名な白洲次郎さん——戦後に米軍の連中に「オマエは英語が上手くないな」と言ったという面白いおじさん——は神戸一中出身（22回）でボクの先輩。この人の伝記のなかには野球部のユニフォームを着た写真があって、一中時代は野球部だったという記載があるのですが、卒業するときには蹴球部のキャプテンをやっていました。留学先のケンブリッジのユニフォームを着てカッコよく練習に来た、という話もあるのです。

この人はものすごい背の高いスマートな選手で、CF（センターフォワード）でした。なかなか

の選手だったらしいのですけど、どういうわけかサッカーのサの一言も言わなかった。先日、小倉（純二）会長が「白洲次郎はサッカー部だったそうですね！」とビックリしていました。それが何でサッカーのことを言わなかったのか……それはともかく、部史にはきっちりとキャプテンとして載っています。写真もあります。兄さん（尚蔵、神戸一中 16 回）は GK でした。

6. 第 9 回極東大会、東大中心の代表チームで初のアジア 1 位に

それはともかく。いよいよそこから御影師範と師範学校に対抗する一つの勢力として神戸一中が出てくるわけです。同時に、その一中の卒業生たちが旧制高校へと進学し、今の京大や東大に行きはじめる。

大正 13 年（1924 年）から、関東と関西で大学リーグが始まるのですが、大正 15 年から東大が 6 連覇をした（～昭和 6 年）。東大には、野津謙ドクターの思惑通り旧制高校からいい選手がどかっと入ってきたのです。

旧制高校というのは各地域にあった一高から八高までのナンバーズクールなのですが、一種特殊な、中学校を出て官立のいわゆる東大、京大を目指す人たちの予備校的な存在でした。もっと後には、府県の県庁所在地などに松山高等学校といった地方の名を冠した高校もできますが、大正の末の頃はまだナンバーズクールが主でした。

旧制高校のサッカー部には、中学校低学年からサッカーをやっていた連中がもちろん入ってきますし、高等学校から始める選手もいた。当時、高校へ入るのはなかなか大変でしたからね。運動神経がありながらも入学試験のために中学時代はスポーツをやっていない生徒もいたのですよ。それが高等学校へ入ると余裕ができて、何か一つスポーツをやってみようと高校からサッカーを始めた。

そのうちいっぺん、中条（一雄）さんに話を聞かなイカンのですけどね、昔の旧制高等学校の 3 年間の練習はまあ、すごいんですよ。私は神戸の予科のときに岡山の第六高校と定期戦があって、寮によく行きましたけど、押入れを開けるとズラッとノートがあっただけ、何十年という部の練習日誌が全部残っていました。空襲で焼けなかったら日本サッカー史研究会にとってはヨダレの出るような資料でしたね。内容は抽象的かつ美文で、いかに猛烈に練習したかというのを書いてありましたね。

六高でボクらが試合前の練習をしているときにグラウンドを生徒が横切ったりすると、どこからか声がして「グラウンドを下駄履きで歩くとはなんだ！」と怒鳴る奴がいるわけですよ（笑）。だから皆、グラウンドを突っ切らしてもらおうと思ったら下駄を脱いで歩かなアカンというぐらい、特殊な雰囲気があったグループなんです、この世代は。

そういう連中が、ちょうど体ができる頃に猛練習をして東大に入ってくる。東大が 6 連覇をしたときも、今の筑波大、東京高等師範の附属中学でチョウ・ディンから習った人たちや神戸一中の連中が高等学校を経て東大に入ってきた。そうした選手たちが、竹腰重丸という、プロよりも一生懸命サッカーに打ち込んだ大先輩の下に結集してチーム力を増した。そのメンバーで昭和 5 年（1930 年）、極東大会のときに、選抜の日本代表チームをつくりました。

1930 年は、今の若い方にとってはワールドカップ開催の年ですが、日本にとっては非常に大事な、第 9 回極東大会がありました。日本で、しかも明治神宮外苑競技場という、その少し前の大正末にできたグラウンドで、東京のお膝元でやるわけだから、負けるわけにはイカンと懸命に練

習をしたわけです。

中華民国、中国と書いた方が分かりやすいんですけど、当時の国名やからしょうがない。中華民国と書きますが——略語で中華と書いたら、なんや中華ソバみたいですね（笑）。その中華民国とフィリピンとの3ヶ国のリーグ戦で、それまで中華民国には全然勝てなかったのを、まあ勝てはしなかったけれど3-3の大激戦で引き分けた。1対1の勝負でロングボールを入れられ3点取られたけれども、日本も3点を取った。PKがあったから本当は4点取らなイカンのですけども、それは失敗して3点。フィリピンには7-2で勝ちましたから、両方1位ということになって、アジアのトップに立った。その主力が、チョウ・ディンに習った附属の選手であり、チョウ・ディンの教えを半日間で盗み取りした神戸一中卒でした。

東大を中心につくった日本代表チームが中国とやるにはどうすればよいか。体格がよく個人力もある中国を相手に、日本はショートパスの組織的サッカーをしました。組織サッカー、たくさん人間が短いパスをつなぐには、たくさん走らなイカン。そのために日本は石神井で1ヶ月間の合宿練習をした。非常にハードな合宿で、岸山義夫さんという追い込みの名人と言われたフルバックなどは結核を発病して、結局、若死にのものととなるような気の毒なこともあったのですが……皆、それぐらい練習をしました。体力をつけてショートパスをつなぐ。誰かが今言っているのと一緒ですよ（笑）。今も昔も、言うてることは同じなんですよ。

7. 小学校からボールを蹴る世代の登場、そして予科を持つ大学の台頭

その頃に、もう一つの効果があらわれてきます。師範学校にサッカーが入ったために、師範学校を出たサッカーの好きな先生が小学校でも子どもたちにボールを蹴らせるようになったのです。東京では早くから小学校大会がありましたし、神戸でも3つほどの小学校がボールを蹴らせていた。

東大の名選手・大谷四郎の兄貴・一二さん（神戸一中31回）はボクより12年上でベルリン世代なのですが、一二（ワンツー）さんによると、チョウ・ディンが御影師範を教えているのを、御影師範付属小学校で見ていたそうです。そうしてチョウ・ディンに習った師範学校の生徒たちが、教育実習で小学生を教える。チョウ・ディンに習いたての技を、小学生に教えていたりしたらしいです。そうすると、小学校からボールを蹴る世代が次に上がってくる。

この世代、旧制高校と帝大がいわば高校3年。東大、京大も皆3年間です。そういう学制だったのが、今度は大正12年に早稲田がまず強くなる。これは高等学院が2年か3年で、計5~6年になるのかな。次いで、早大に負けじと慶応にサッカー部ができます。ここで、明治もそうですが大学の予科がある学校にサッカーが浸透します。早稲田は少し早いわけですけどね、その早稲田と東大を追って慶應がサッカーを頑張り始める。

そうなる今回は、まあ遊びですけども小学校からボールを蹴り始めた、小さいときからボールに慣れた世代が旧制中学に入り、高等学校あるいはサッカーの強い学校の予科へ進む連中が出てくる。

今の大学は4年ですけども、当時の大学というのは普通でいけば予科3年、大学本科3年で6年間です。ですから腕の立つ選手は予科1年か2年、18か19歳のときから大学リーグに出て、5歳くらい年上の人と一緒にプレーできる。今ふうに言うなら、高校を出たての選手が、大人に近いU-23、6年上の連中の中へ入ってやれるわけです。東西対抗にも出ます。これは上達ということからすれば、明らかに有利ですよ。これが一つの、予科を持つ大学の台頭につながり、この層がベルリンへ出かけていきました。1936年のベルリン・オリンピックのメンバーは、いわゆる

早稲田と慶應——ほとんどが早稲田ですけども——が主力を占めました。

1930年の選手は個性があって、もちろんボクは非常に好きですけども、ベルリンはベルリンでそういう育ち方をした選手が来ますから、チームワークというものに対する考え方がもっと鮮烈になってきたようであります。

そうした学校制度のなかでそこへ選手を送り込んで行った中学校があります。師範学校の生徒たちは学校の先生になってしまうので、そこからはあまり輩出されていませんが、県単位ではそれぞれOBとして活躍される選手は多かったです。

8. サッカーの盛んな神戸。神戸一中では弁当を食べながらボールを蹴っていた

ボクが小学校のときには山口先生という、50m走を走ったら吉岡隆徳（ロサンゼルス五輪 100mで6位入賞）とどちらが早いのかという足の早いことで有名な先生がいました。その先生はサッカーが上手で、「賀川兄弟は兄貴の方が上手だったけどな」なんて言われました（笑）。そういうふうにはサッカーの好きな選手がたくさんおられてですね、小学校のときに冬の授業はサッカーをやっていた。それから、自分たちが直接教えることはそんなにはないんですけども、皆がやっているのを見ていました。そういう経験があるから、神戸一中では休み時間、昼休みはどういうわけか野球ではなくボールを蹴るのが当たり前みたいになっていましてね。

これは、初代の鶴崎校長のときからの習慣で、昼飯を部屋の中で食ったらイカンのですよ。グラウンドで食べるんです、いわゆる立ち食い。これだけは今もって不思議だけれど、ボクらは当時あんまり不思議に思わなかったですね。冬のさなかでも外でご飯食べるのが美味しいんですよ。慣れるとドカ弁、弁当を手にとって……皆よう食うもんですからおかず入れは別なんです。弁当の蓋をずらして、おかず入れをその端に乗せて食べたのですが、そこへボールが飛んでくるんです、皆がサッカーをやっているから。それを足で止めて返すのですがね、上手い奴は一振りでもーンと返す。笑い話みたいですが、立ち食いのときでもボールを、軟式庭球のゴムマリを蹴っていたんです。ゴムマリをちゃんと蹴ろうとすると大変ですよ。

ボクの同期は、サッカー部の奴はあんまり運動神経が発達していなかった。ラグビーの方がええカッコができるし、ウチのラグビー部はサッカー部ほど練習が厳しくなかったから、サッカーは練習がきついからイヤだとラグビー部に行っている奴もいたんですよ。だから、サッカーをやらせたら皆ボクらより上手かった。

その中の一人、平山君なんていうのは弁当を食べながら、飛んできたボールを止めて、いっぺんボールを踏んで上にピュンと上げてそれをボレーで蹴り返したりしていました。そういう特技を持っている連中が学校の中にたくさんいたし、彼らの中の何人かはインターハイの名選手になりました。

そういう風に、学校の中でボールを蹴るのは当たり前だと、神戸の中学校の中では思っていましたので、新聞社に就職して大阪へ行ったときには、「へえ、大阪ではサッカーって何でこんな端の方なんだ」という感じでした。

大阪では北野中学（北中）、天王寺中学（天中）が東京でいう一中、二中みたいなもので、そこはラグビーが盛んなのです。岡田武史は天中が天王寺高校となってだいぶ経ってからサッカー一部ができて入ったんですけど、ラグビーで有名なところだから、岡田武史が天中だという話をすると今でも、古い連中には「天中はラグビーだけやろ」と言う奴がいたりします。大阪では明星はサッカーが強かったのですが、ナンバーズスクールがサッカーはあまりやっていなかったので浸

透の仕方が兵庫と大阪では全く違っていた。これには感心しましたね。

今度の威勢のいい知事（橋下徹）も北中でラグビー部出身ですよ。そういう違いが、大阪へ来てみて、なんでこんなにサッカーの地位が低いのだと驚きました。その点は兵庫県とまるで違っていた。ですから、兵庫県の滝川第二は、黒田（和生）先生以来しっかり練習をしてきて、ようやく全国優勝しましたが、古い連中はイライラして眺めていたわけです。

しかしながら、その頃の神戸一中の連中の体力や運動神経を今ボクが公平に見れば、今の滝二のサッカー部に入りたいたいと言ってもたいてい門前払い、入れてくれるやろかな……と思います。ボクらの後先の連中が以前話していたのは、まず書類選考ではねられるやろうなと（笑）。そういう、滝二に行けば門前払いになるような選手ばかりでしたけども、どういうわけか、練習のおかげである程度の成績が残せました。この一つの要因が OB です。

9. 部史をまとめ、神中クラブを組織化。現役と OB をつないだ河本春男先生

神戸一中のサッカー一部史に、大谷四郎さん（朝日新聞）、岩谷俊夫君（毎日新聞）とつくった『ボールを蹴って 50 年』というのがあります。これが出たのが昭和 43 年（1968 年）で、日本のサッカーの、あるいは高校・学校のサッカー部史の始まりみたいな、ブームのきっかけになったのですが、それよりずっと前の昭和 12 年（1937 年）に、大正 2 年（1913 年）に創設されたサッカー部の話、昔の歴史をまとめたものがつくられています。

昭和 7 年（1932 年）に、刈谷中学（現・刈谷高校）から今の筑波大、東京高等師範学校を出た河本春男という若い先生が一中にきました。刈谷中学は愛知県という野球の非常に盛んな土地にありながら、イートン校に習って英国式の教育をしていて、初代校長のときに野球でなくサッカーを校技にしたのです。日本代表の元監督で、第 6 回の日本サッカー殿堂に入られた高橋ロク（英辰）さんも刈谷中学の出身、河本さんはロクさんの先輩に当たります。ロクさんは、いわゆる岡野、長沼の前にクラマーと一緒にあって次の世代を引き継いだコーチです。

河本春男先生のごことは、一中の第 2 代池田多助校長（神戸一中 3 回、野球部）が目をつけ連れてきました。東京高等師範に将来優秀な指導者になるだろうキャプテンがいて聞いて、自分でもらいに行ったのです。昔の高等学校はそんなことができたのですよね。

そうして卒業と同時に赴任してきた河本春男さんは、そこで神戸一中サッカー部というものを見直します。神戸一中の先輩たちがすごくて、昭和 5 年の極東大会にもたくさんいい選手を出しているということ、河本先生自身も刈谷時代に試合で勝ったり負けたりしたので良く分かっていたわけですが、その先輩たちが春休みや夏休みに教えに来ているという事実を目の前に見て、それを組織化しようと考えたわけです。

すでに「神中クラブ」という OB のクラブはありましたが、これをもう少ししっかりしたクラブにした。これは今から考えればすごいことです。河本先生がそこまで考えたかどうかは別としても、その頃、海外の本など知りませんからね。

旧制中学というのは U-17 ぐらいの年齢になります。この世代の中学生の現役を、OB たちが春夏の休みに集まってきて指導するようになる。ですから我々の練習（試合の）相手というのはいつも、いわゆる高校や大学の選抜。U-23 日本代表候補みたいなのがゾロゾロ練習に来てくれるから、いつもそれとやらないイカン。そんな人たちに「おまえら、なんで 1 点もよう取られへんのや」と怒られる。悔しいのでなんとか点を取るように頑張る。そうすると向こうもちょっと手加減をして、脇をあけて抜かせてくれたりする。その次に、本気でボールを取りに行くと、今度は中学

生の方が調子に乗って先輩を抜いてしまったり……そういうこともありまして、非常に上達のスピードが早かったわけです。

その成果が後にあらわれるのですが、河本先生は赴任してきたその年度のうちに、体の小さい34回生のチームを昭和8年（1933年）1月の全国大会で優勝させてしまいます。

当時の連中は雨の日は練習しなかったのですかね？ 雨の日に練習をさぼっていたら新任の河本先生がいきなりやってきて「雨でもサッカーはあるだろう、一緒にやろう」と選手を表に引っ張り出したそうです。赴任早々ですから4月のはじめですよ、まだうすら寒い日だったらしい。土砂降りの中練習をして、当時は熱いシャワーもないから冷たい水で体を拭いて部室に戻ったら、先生が近所のうどん屋に熱いうどんを注文してくれていたそうです。それで選手たちは「この先生にはかなわん、参った」と思ったらしい。そうして選手の心を上手くつかみ、少し天狗になりかけていた連中を優勝に持っていくわけです。

そういう実際的なことをしながら、先輩の力をもっと計画的に利用したいと考え神中クラブを組織化した。その会の一つの目玉として、春休みに神中クラブの東西対抗をやろう、部史をつくらう、と考えた。部史は昭和12年にできたのですが、部史をつくる、歴史を振り返るということで先輩たちがしょっちゅう集まってきて座談会をし、それを文字に残すという作業をした。そのことによって、もう一度OB会の団結を強めました。それが昭和12年のことですから、すごいですよ。1937年、ベルリンの翌年です。それを河本さんが考えだした。

その後、河本先生は1939年（昭和14年）、学校の中が乱れた岡山女子師範を立て直すため是非にと乞われて転勤されるわけですが、先生がつくった基盤は非常にしっかりとしました。練習計画は選手が自分たちで考えて部長と相談をすることにしたり、メンバー編成に関しても、それまでは色んなOBが口出ししていたのを、部長が決めることにした。当たり前のことですけどね、とにかくOBには日本代表がゾロゾロいましたから、先生であろうとサッカーが上手くなければ相手にしてもらえない。しかし河本先生はサッカーが上手で、足も速く、体力的にも若いので一緒にやってもへばらない。しかも実務の面も非常に上手く、若い選手の心をつかむのも上手だった。何でもできるので、兵庫協会の事務まで引き受けてやっていた時代もありました。

実は、河本先生はボクの家の方に間借りをして、サッカーは上手いけれども勉強はサボるといってワンパク坊主やら、わざわざ篠山から来ているという医者の子やらを預かって暮らしていた時代があります。自炊しているのを、うちのお袋が見かねておかずを差し入れしたりしているうちに、我が家へもやって来るようになった。ボクの兄貴は野球が上手かったのだけど、先生がサッカーをやらせるといいと言って……それから賀川家は、河本先生のおかげで、こんな変な商売になってしまいました（笑）。そういう非常にユニークな先生でした。

戦後は岐阜県の教育委員会にいたのですが、米軍の言う通りの教育方針を押しつけられたら、「そんなことできるか」と言うて飛び出して教育者をやめちゃった。その後、担ぎ屋なんかをして高山からバターなんかを運んでいるうちにユーハイムと仲良くなり、ユーハイムのエリーゼというドイツ人のおかみさんに見込まれ専務になって、ユーハイムという会社を引き受けるわけです。第2の人生でビックリするような成功を収めたわけですが、しかしボクに言わせれば、ユーハイムは実にいい企業で大したものやけれども、世間がやらないうちに、神戸一中の歴史を振り返るといって求心力をつけ、そしてまた神中クラブを組織化して先輩が絶えず来るようにしたことの方がずっとすごい。

僕が中学4年でマネジャーをやっていたときには、春休みと夏休みの間は、木曜くらいに必ず「日曜に試合をするので必ず来て下さい」ということを書き、主な先輩たちに速達で出していま

した。そうすると、いいメンバーが来てくれて、先輩たちが寄ってたかって教えてくれたのですが、そこにはおのずから秩序があって、まずは西村（赤川）清さんにおうかがいをたてた。西村さんは、ノコさん（竹腰重丸）と同じロービングセンターハーフだったのでレギュラーではなかったのですが、神戸一中から松山高等学校から京大へ進みキャプテンをしていました。この人が一番の長老格で、西村さんが「ウン」と言えば皆従ってやるという感じ。ですから非常に統制も取れていました。理論家の大谷四郎さんなどは、若くても5つ、6つ上の先輩からも一目置かれていました。

10. 中学生に最新の3FB制を導入

ボクが今でも覚えているのは、昭和13年（1938年）。この年、神戸一中は予選から決勝まで全て無失点で優勝しました。当時はこの中学でもCFが強かったのですが、中学生ながら3FB（フルバック）システムを取っていたウチは、相手のCFをきっちりマークして抑えることによって無失点で勝ち上がって優勝します。

3FBシステムは、日本代表はベルリンオリンピック（1936年）のときに初めて、それまでのロービングセンターハーフから変えて取ったシステムでした。種田孝一というセンターハーフがこの戦術をのみこんで、スウェーデンとの試合でも上手く防いで3-2で勝ったわけです。

11. 難敵・朝鮮代表のチームに対抗

当時の強豪の一つが、日本の一部であった朝鮮地方の代表でした。彼らが来ると分かった、「これはすごい、いいチームとやれるぞ」とボクたちは色めき立つのだけど、始業の関係とか色々、来られないことがあって、せつかくの全国大会なのにポツポツと抜けているのですよね。

昭和3年には崇実という朝鮮地方の代表が来ました。このときは御影師範があまり良くなくて（1回戦敗退＝東京高師附属5-4）、崇実が完勝して帰っています。その次に来たとき（昭和4年）は御影師範が平壤高普とすごい試合をして、6-5で勝ちました。我々の間ではその頃から、2歳上の師範学校に勝つと同時に、自分たちのやり方でないと朝鮮半島から強いチームが来たらそう勝てないんじゃないか——と思うようになっていました。

昔、ベルリン五輪には行かなかったけども、上手さ速さの点では当時ピカイチの一人であった大谷一二さんに、「大谷さんの中学時代は強かったですね」と、昭和5年に優勝したときの話をしたら、「あのときは朝鮮代表が来ていなかったからな」と、非常にそっけない。朝鮮のチームが来なければ優勝してもあまり値打ちがなかったような言い方をされました。聞いてみたら、大谷兄弟はその前の、御影師範と朝鮮代表がものすごい試合をして御影師範がやっとなんと勝った——という試合を甲子園球場で見たらしい。それがどうも一二さんの印象に残っていたのかなと、今頃になって推し量っています。昭和5年の神戸一中のチームも非常に強くて、御影師範も姫路師範も「今年の一中には勝てない」と言っていたくらいだったのですが、本当にものすごくあっさりと言ったのでね……。

一二さんの同期に、加藤正信ドクター——のちに神戸フットボールクラブをつくり、少年サッカーを始めるのに機関車みたいな推進力をみせた人——がフルバックでいました。加藤・山本卓

美の両 FB からのクロスパスが、短いパスだけでなくロングパスも出るようになった、というのがこの頃のチームの自慢でした。

いつだったか、加藤ドクターが OB の試合で遊んでいるのをクラマーと見ているときに、「あの人は俺の先輩で FB だった」という話をしたら、クラマーは「見たら (FB だと) 分かる」と言いましたよ。とにかくキック力が年を取ってからもありましたからね。

それから、一中では、両ウイングの大谷・右近 (徳太郎) という両サイドのウイングのドリブルというのが一つの名物になっていました。右近さんと一緒にベルリンへ行き、スウェーデン逆転劇の最初の 1 点を入れた川本泰三という早稲田の先輩は、「大谷や右近は中学のときから関西のサッカー仲間では有名人やったからな。オレの目標は生涯、大谷一二だった」と言っていました。「オレは大谷一二みたいに足が速くないから、どうすれば大谷を越えられるかというのが生涯のテーマだった」と。川本さんはそういうことをしょっちゅう、一緒に釣りに行ってもどこへ行ってもよく話していましたね。大谷一二というのはそれぐらいの選手でした。そんな一二さんにとっても、朝鮮半島が来ていないのが心残りのようでした。それぐらいまあ、朝鮮半島のチームは印象的だったのです。

ボクが中学 2 年生の時、昭和 13 年 (1938 年) は失点 0 で勝ち上がって、準決勝で崇仁商業という朝鮮半島のチームとやりました。このときはやはり 3FB でした。うちの兄貴は当時 4 年生でレギュラーで出ていましたが、ボクは合宿には入れなくて、前日に親父と合宿所へケーキを持って差し入れに行ったのですが、そのときに河本先生が「崇仁の CF は非常に上手い。これを抑えるのに松浦 (巖、一中 41 回) をつけることにする」と言っていました。松浦さんは後に東京商大に行ってキャプテンをした人です。もう一人、水澤 (淳也、一中 40 回) という上手いハーフバックがいたのですが、この人は CB ではなく SB だったので攻撃的に使った方がいいということで、いわゆるディフェンシブハーフであっても、そっちの方に回したのでしょう。

左の 5 年生の水澤は上手くて体力がありましたが、右は 4 年の宮田孝治 (一中 41 回)。宮田さんは後に日本代表としてニューデリーやアジア大会に行った選手ですが、河本先生は、その二人を夏の連戦で交互に使っていました。そのへんが河本さんという監督の、ちょっと、今から思っても……まあ今考えれば当たり前のことですがね、当時としては選手の層がそう厚くないからそんなことは考えられないわけです。そんなときに、同じように使える選手がいれば一日置きに代えたらいいのだと考えた。だから二人のうちどちらかがいつも「オレは決勝に使ってもらえなかった」ということを言っていたが、河本先生はそういう実地的な指導も上手かったと思います。そういう先生がいて、OB の力があったおかげで、我々はどちらかという今この滝二では門前払いになるような素質の選手でも、なんとかいい試合ができたのだと思います。

12. 河本先生の影響は転任後にも及び、4 年間で全国優勝 4 度

ちなみに、崇仁商業には 3-0 で勝って、決勝は滋賀師範に 5-0 で勝ちました。その次の年は、うちの兄貴が最高学年の年なのですが、河本春男という優秀な部長が転勤してしまい、岩田太郎という、やはり東京高等師範を出た先生が部長になったものの、若い岩田先生の力では OB のいろんな意見をおさえることができなくて、私自身もまだ 3 年生ですから、マネジャーをやっているも権限がなく、練習のコンディショニングを誤って、夏の全国大会では 2 回戦で札幌師範に負けています。

この年、昭和 14 年 (1939 年) の秋に明治神宮大会というものができます。それまでは日本選

手権と同様に大人の大会だけだったのが、中学の部ができました。それで賀川太郎たちはこれ幸いと試合に出て、優勝した。

この頃は、青山師範は強かったのですが、師範学校全体のレベルは落ちていました。神戸の場合は、姫路と御影が合併して兵庫師範となってから、いわゆる御影師範という印籠みたいな名前がなくなってしまい、サッカーもどちらかという校内的にも勢力が落ちて、あまりもう、相手ではなくなっていた。だから我々の目標は朝鮮地方のチーム。あるいは東京の師範学校が強ければ、彼らが相手。それ以外は、極端なことを言うと「目じゃない」というぐらいのつもりでおりました。

賀川太郎のときは、夏の大会に優勝した広島一中は非常に強かったのですが、神宮大会ではその広島一中に準決勝で勝って、決勝は明星に勝った。それで広島師範との天覧試合があって、天皇陛下の前で10分か20分か試合をしました。

昭和15年は我々は弱くて、夏の全国大会は神戸三中が出ています。この頃は、夏の大会が終わった9月には次の年度に引き継ぐことになっていたわけですが、神宮大会ができたことで賀川太郎たちのチームがそちらに出て勝ちたいということになり、11月まで5年生のレギュラーの練習になったわけです。ですから、ただでさえ手薄な4年生以下の、それこそ滝二に門前払いされるような3年生と4年生が、9月には新しい練習を始めなイカンところが11月になってしまった。その2ヶ月のブランクがものすごく大きくてですね、5年生が3人しかいないこともあり、色々相談をして、今は勝てなくても次の基礎練習にまわそう——という年度にしました。

そのおかげで次の昭和16年度、ボクが最高学年の年は、4年生に岩谷俊夫、杉本茂雄といった後の日本代表になった連中になった者も出てきた。この年は、全国大会は開催される予定だったので、ちょうどドイツが戦争を仕掛けてスターリングラード攻防戦の真っ最中。日本にも、ロシアを東からつついてくれということをドイツに言われたのですが、日本陸軍はロシア恐怖症ですから、ようつつかないで、演習だけやろうということになった。それで関東軍特殊大演習（関特演）というものすごい動員をかけて、戦争用の物資と兵員を満州に送ったために交通が全部ストップしてしまって、夏のこの時期には高校野球選手権も、大会が全部なくなってしまいました。このあとに戦争が始まるのですが、まだ平穩の時分でしたから、ボクたちは神宮大会だけはあって、普成中学と試合をした。これは2-2で引き分けて、時間がないものですから延長なしで両校1位となりました。

次の年度、昭和17年（1942年）は岩谷君の年。戦争は始まっていましたが、日本も始めのうちは調子が良くて、スポーツを奨励するというのは良かったのですが、文部省がとうとう神輿をあげて、野球もサッカーも新聞社が主催する大会はまかりならん、学生のごときは文部省の管轄である学徒体育振興会がやるのだということを言い出して、それで昭和17年に、樫原宮という大会が始まりました。

この大会は中学校と師範学校とで分かれていました。岩谷君のチームは中学生相手ではそれこそ、近隣の中学生は問題ではなくて、ライバルは年上の師範学校か朝鮮の学校だというつもりでレベルアップした練習をしていたものですから、予選から決勝まで9試合で70-0だったかな。まあそれは中学校のレベルがいかに落ちたかという話でもあるのですが、1年下の連中はそれで威張っています（笑）。

神宮大会は師範の部も一緒にやって、青山師範が強く、決勝は2-2の引き分け。これも延長なしで両校優勝ということになった。このときは朝鮮半島から培材中学という強いチームが来ました。これには1回戦で3-0で勝った。けれどそれで目標の朝鮮の学校に勝ったものだから機嫌を良くして、最後は青山師範にガチンとやられて引き分けに終わりました。

13. 敗因を半世紀考え続けた青山師範の太田哲男さん

青山師範は前年の昭和 16 年度も強いチームで、のちに筑波で部長もやった太田哲男さんとはボクも試合をしたことがあります。太田さんは、大阪商大で長くやっていた上田亮三郎先生の選手時代に、監督だった人です。スマートで背の高い格好のエエ選手で、センターバックでした。どういうわけかセンターフォワードをやらされていたボクは、その背の高い太田さんのそばをちょこちょこっと走ってね（笑）。今のイニエスタほど上手ければいいのですが……それでもちゃんと点は取りましたけどね。

太田さんが面白かったのはね。JFA（日本サッカー協会）の 75 周年のパーティー（1996 年）のときに久しぶりに会ったら、「ひろちゃん、久しぶりやなあ。あのときにやられたけどな、あれから何年もかかって青山師範はその原因を考えたよ」と言うのです。あの時のチームはね、本当は普成中学より強かったかも分からないくらいいい選手が揃っていました。それでボクが太田さんに「あなたのところのチームは、ウイングからウイングへボーンとクロスパスを出したら逆サイドまで、右のウイングから蹴ったら左のウイングまで届くからたまげたよ」と言ったら、太田さんは「いや、遠くへ蹴るのは上手いけどね、短いパスがダメだったんだよ。それで我々が反省したのはね、何が足りなかったかというそれはサイドキックだと、そういう結論に達したよ」と。その話を聞いたのが協会の 75 周年の時やからね、試合からもうだいぶ経っています（笑）。あのときの青山師範は本当に強くて、東京の先輩たちは朝鮮半島のチームより青山師範の方が強いだろうと見ていました。そういういいチームでしたけども、残念ながら、短くつないで裏へ通すという我々のやり方に引っかかってしまったのですね。

14. 神戸一中のタイトル獲得数

兵庫県勢の高校選手権優勝（滝二）が神戸一中の昭和 13 年（1938 年）以来ということになっているので、神戸でも今、一中はもっとたくさん優勝しているだろうと不思議がっているのですが、それは実は、昭和 15 年（1940 年）からは全国大会がなくなっているからです。明治神宮大会は何と言っても明治天皇の名を冠した畏れ多い大会ですから、それは昭和 18 年（1943 年）の学徒動員で皆が出払ってしまう直前になるだけで、昭和 17 年まではやっていました。昭和 14 年（1939 年）に始まった明治神宮大会・中学の部の 4 回のうち 3 回を、神戸一中が勝った。これは別に自慢ではなくて、記録としてはそういうことになっています。ですから、全国大会の優勝回数となると、もう少し多くなるわけです。

それからもう一つは、毎日新聞が冬の全国大会を昭和 10 年（1935 年）から夏に切り換えたことがあります。ベルリンオリンピック（1936 年）が開催されるのは夏、8 月です。それで「サッカーは夏にオリンピックがあるのだから、大会を夏にしようじゃないか」と、毎日新聞のなかで言い出した者があった。ボクは、これはラグビーとサッカーをいつか分離したいと考えていたグループがあって、その作戦だったと思っています。

昭和 8 年（1933 年）は 34 回生の播磨光太郎たちの神戸一中が優勝。その翌年は 5 年生が一人で、これは予選で負けて岐阜師範が優勝したのですが、その次の年は、慶應へ行った二宮洋一、

笠原隆、津田幸男といった錚々たるメンバー。神戸一中サッカー史の中でも、おそらく最もメンバーが揃っていた時代の一つでした。東京オリンピック（1940年）があればレギュラーになったであろう連中が、昭和10年1月に試合をやるはずだったのが、それが夏に移ってしまった。それで大会が1回消えちゃったわけです。大会が消えるのはその年度の選手に申し訳ないからと、昭和9年（1934年）の夏に招待大会が開かれ、御影師範だとか、刈谷、青山師範だとかが集まったのですが、6チームだけの大会でした。

二宮さんというのは、年を取ってから天皇杯などで活躍しましたが、その最盛期をどういうわけか逃してしまった名選手です。東京オリンピックも流れてしまって、神戸一中のときも、招待大会で優勝はしましたが、全国大会はなかった。とはいえ、招待大会であっても毎日新聞が主催した全国大会なので、我々はタイトルの一つに勘定しています。そうでなければ、二宮洋一たちは浮かばれないでしょう。

この年度は……これはおそらく河本先生のアドバイスだろうと思うのですが、行き場がないものですから、その辺の大学、高専と片っ端から試合をしています。インターハイで優勝した六高に挑戦して勝ち、高専大会で優勝した神戸高商にも勝って……関西学生リーグ1位の京都大学には負けたとあって、中学生のクセに残念がっていた（笑）。そういうエピソードを残したチームでもありました。

大正の末から昭和のはじめの頃には、神戸高商（神戸商大）あるいは関西学院や大阪の関西大学が主催する大会など大学主催の大会もいくつもありました。それらを全部まわって、全てに勝つと、一つの大会で少なくとも4試合はやることになりますから、試合数としては年間30試合くらいになりました。だから、この時代に上手になった、強くなった選手たちはほとんど、練習というよりも試合で、何月ほどの大会、何月はこの大会と順番に出て行って、しかもノックアウト・システムで、強ければ何試合もやれるから、冬の日本フットボール大会（全国中学選手権）には腕を磨いて出場できる仕組みになっていた、というのも一つあります。大会が夏になってからは、9月になると練習のスケジュールは次の年度に引き継ぐことになりますから、そこはちょっと違うのですが。というのも、秋になりますと日が暮れるのが早いですからね。適当な相手をつかまえて試合をした方が手っ取り早い。ボクも、色々苦勞しながらスケジュールを組んだことを覚えています。

ショートパスの技術そのものについても、お話したいことはまだまだ色々ありますが、そういう経過を経て、大学、中学の中で、優秀な部長が来て、優秀な先輩たちもいて、その教育によって、自分たちの体格が小さいという特長を生かす短いパスをつなぐサッカーを始めて、それが昭和5年（1930年）極東大会の日本代表、昭和11年（1936年）ベルリン・オリンピックにもつながった。そういう意味では神戸一中は多少、歴史のなかで役割を果たすことがあったかなという風に、私は眺めております。

戦前の育成法ということだと、もっと色んなことを言わなくちゃイカンのですが、私は自分の一番知っている神戸一中を例にとってお話をさせて頂きました。どうもありがとうございました。

【了】

【質疑応答】

(1)

牛木：先日、賀川さんの後輩の細谷一郎さん（神高 16 回）にあって、神戸高校は戦後、神戸一中の伝統を受け継いでテクニック重視のサッカーをやっていたのかと聞いたら、「いいや、そうではない」と、「我々の頃は、どちらかという蹴って走るサッカーで、先輩の岩谷（俊夫）さんがコーチに来て、クラマーのサッカーを持ち込んで、技術重視、パス重視のサッカーに戻ったのだ」——という話をしていましたが本当でしょうか。

賀川：細谷さんは、高山（忠雄）先生が直接指導した世代ですよ。高山さんというのは昭和 5 年の極東大会の右ウイングで、足が速くてドリブルの上手い名選手でした。肉体的な素質のある人で、神戸一中としては、今の滝二に行っても門前払いされないくらいのいい素材です。

この先生はノコさん（竹腰重丸）より一つ年上、昭和 5 年の極東大会のときには東大の現役でした。彼も卒業してから東大の学生課に入りますが、これも変わった人でね。戦後に神戸高校ができたときにその校長になり、男女共学から何から、非常にスケールの大きい良い学校にしてくれたのは確かです。

それで、先生はご自分がサッカー好きなものだから、自ら教えるわけですよ。すると、同じ OB でも自分がサッカーを教えた生徒たちは頼りなく見えるらしくてね、若い先輩が行ってもあまりいい顔をしない。たまにボクたちの世代が練習に顔を出すと、色々なことを聞いてきたり、生徒を集めて話をしてくれと言うのですけど。

ですから、若い先輩たちと現役の交流がなかったのと、それから先生自身がどちらかというスピードのある、個人的な能力の高い人だったことが影響しているでしょうね。

短いパスをつないで攻めるとなると、たくさんの人数が絡みますよね。ボンと蹴ったボールに、誰か一人足の速い奴が行くというなら、上手い選手は二人おったらいいわけです。正確に長い距離を蹴れる奴と、足の速くて上手い奴、二人おればいい。しかしパスをつないで、ボールに 3 人も 4 人も絡むとなると、皆が上手くならないかん。その工程が高山先生にはまどろっこしかったのじゃないかなと思います。それに、高山先生が「こうやる」と言うてしまったら、もう誰も反対できませんしね。

でも、ボクたちが行くと本当に色々なことを聞いてくれたんですよ。例えば、「賀川さん、なんであの子はセンタリングが曲がらへんねん」というようなことを聞かれたことがありました。見るとその選手は立ち足が蹴る方向を向いていない。それでボクが「先生、あの子は立ち足が蹴る方に向いていないじゃないですか。先生もウイングだったでしょう」と答えたら、先生も「あっ、そうか」と。そういうふうにはボクらの言うことはちゃんと聞いてもらえました。

でもまあ、高山さんほどにかく技術よりスピードの選手ですよ。

(2)

中西：お話をうかがいながら、野球の話思い出しました。野球は明治のはじめに入ってきて、最初に一高がすごく強くて、それを追いかけて慶応が強くなり、さらに裾野が広がり全国に広がった。それに似ているなと思いました。

そうするとつまり、戦前は、外国の文化というのはまず最初に帝大に入って、それが早慶、高師に……という流れで大学に入ってきたのでしょうか

賀川：陸上競技でも、一高、東大の運動会が一番先ですよ。JFA の初代会長の今村次吉さんも

一高、東大でランニングの大家でした。ラグビーだけは慶応に先に入りましたが、あれは特殊です。

それは、何しろ大学というのは東大が一番早くできたからでしょう。福澤（諭吉）さんの慶応も学校としては早くできていたけれど、そんなに、いわゆる大学という体をなしていたかというボクらには分かりません。

一高は野球が非常に盛んだったのですが、その野球部の練習グラウンドに野津謙さん、のちの野津ドクターがサッカーのゴールポストを建てた。これは野津さんの手腕なのですけどね、それには、中国から来ていた留学生の後押しもあったと、どこかで読みました。当時は日本の社会がだんだん良くなっていたときで、日清戦争にも勝って、「日本に学べ」ということで中国から留学生がたくさん来ていました。

(3)

真田：東京高師の関係者が具体的にどんな風に、全国の地方の中学校などのスポーツに関わってきたかを具体例で話して頂き、大変勉強になりました。ビルマから来たチョウ・ディンさんについては、どんな方なのか、かなり分かっているのでしょうか？ どこでサッカーをされていたかとか……

賀川：それがね、チョウ・ディンさん自身については分かっていないのですよ。彼の生い立ちとか歴史とか、その後のことは全く不明。JFA も調べているはずけども、なかなか先へは進みませんね。殿堂入りの表彰をしたときもビルマの代表の人が来ましたが、その方たちも、彼については全く知らないということでした。

日本が太平洋戦争でビルマを占領したときに、藤岡（端）さんというチョウ・ディンの指導を受けた東京高師附属の先輩たちも調べたそうなのですが分からなかった。

チョウ・ディンさんに習っていた当時は、彼がどこでどんなことをしていたというような詳しいことは誰も聞かなかったようです。とにかく、本人の歴史を聞くよりもサッカーを習うこと、実技の方に一生懸命励んだのでしょ。

チョウ・ディンさんは自分の本『How To Play Association Football』の前書きに、「スコットランドでフットボールは起こった」と書いているから、スコットランド人に習ったのでしょう。当時の社会情勢では、ビルマにスコットランド系の人がたくさん仕事に行っていたという話もあるので、おそらく間違いないでしょう。写真を見ると、いわゆるビルマ人の顔でなくインド系の顔です。走り幅跳びの選手で、非常にすらっとしていました。

中塚：補足させていただくと、『附属中学サッカーのあゆみ』にチョウ・ディンさんの話があって、竹内至さんが「日本で初めてボールに触れたのは大正9年頃と思われる。彼の著書にサッカー歴を14年と書いているが、ビルマでの様子は知る由もない」と書かれています（笑）。

「蔵前工業、今の東京工業大学に留学してこられたのだけど、日本の蹴球代表選手が東京高師のグラウンドで練習していることを知り……」つまり（グラウンドを指さして）そこですね。チョウ・ディンさんはどうもこの近く（大塚近辺）に住んでいたらしいです。それで「ぶらりと遊びに来たものと思われる」とあります（笑）。

賀川：新田純興さんによると、チョウ・ディンさんは平井武さん（第5回極東大会・走り高跳び優勝）と一緒に練習をしようと早稲田のグラウンドへ行ったところ、サッカーをやっていて、選手たちがあんまり下手なので「ちょっと教えてやろうか」となったという話もあるそうです。

我々も、知っているのは、竹内さんの書きものやら……。ここの学校（筑波大学附属高校）は非常にチョウ・ディンさんと付き合いが深いですからね。それは非常に参考になっていますが、そこから先のことはほとんど分かっていません。

以上